



幕屋、神殿
なだめの蓋 (贖罪蓋)

なだめの蓋 ^{ふた} kaporet - kaphar - kippur KPR 2018.7.19
贖罪蓋 ^{カポーレット} ^{カフアル} ^{キプール} ^{root}
しよくざいがい ^{H3727} ^{H3722} ^{H3725}
蓋子.cover ^{あがない(の日)} ^{ヨムキプール}
LE'16:11-14 ^{あがないの日}
あがないの日には血を流す



- 主が語る 出25:22.民7:89
- 贖いの日 LE'16:23:
- 足台 座立46:2, (歴28:2)
(ケレビム像 1346, 8:6-7, 2歴3:)
(声 エゼキエル:24, 9:5)

また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋があり、そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナの入れた金の壺、芽を出したアロンの杖、契約の板がありました。また、箱の上で、栄光のケルビムが「宥めの蓋」をおおっていました。
ヘブル人への手紙 9章3〜5節



oracle 神託所
至聖所の別名: 内堂
dvir - dabar DBR
ケルビム ^{H1687} ^{H1696}
言う

H6767
シンベル - いなご 民衆の羽は4枚
2466:5 ^{エゼキエル:11}

契約の箱の上をおおっている蓋。「贖罪蓋(しよくざいがい)」とか、「贖いの蓋」とか、「なだめの蓋」と呼ばれる、そのなだめの蓋という言い方は、「なだめの蓋」という言い方で、ひとつのことばです。カポーレット(kaporet)という契約の箱の上に置いてあるものというものがあります。

ヘブル人への手紙(9:5)の至聖所にあるものとして、金の香壇、契約の箱。箱の中には、つぼと杖と板。「また、箱の上には贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。」ということですね。(絵)蓋をおおっているケルビム。ケルビムは顔が複数あって、翼が2枚ずつつくっついている。足は、エゼキエルを見たりすると車輪になっている。これは、血をつけているという絵です。それで、香で覆われているということですね。

新改訳2017年度版では、「宥(なだ)めの蓋」という訳で、統一されています。もともとは、カポーレット(kaporet)。カポーレット(kaporet)はカーフアル(kaphar)という「塗る」とか、「おおう」とかいう言葉から来ているようです。

ヨムキプールという贖いの日がありますね。ヨムキプール(kippur)というものも、これで見ると、KとPとR、KとPとR、KとPとRというルート(root)ですね、語根、ここが同じです。「KPR」そのつながりで、これらが同義語ということになります。その蓋に、レビ記16章であがないの日、仮庵の祭りの時の7月10日です。大祭司が1年に1回、至聖

所に入って、このあがないの蓋に血をふりかけるとというのがヨムキプールの日です。あがないの日の話です。

このケルビムが大切ですねということで見ました。ケルビムの間から主が語るという言い方があります。まずは出エジプト記25章で、契約の箱の造り方を話しているところで、ケルビムがいるなだめの蓋を作りますと。翼で覆っているのですね。むかい合わせにして。ここに書いてあるのが、22節「すなわち、あかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。」と言ってくれます。民数記7章89節にいけにえの話をしているところで「モーセは会見の天幕にはいると、あかしの箱の上にある贖いのふたの二つのケルビムの間から、彼に語られる御声を聞いた。主は彼に語られた。」という主はケルビムの間から語ってくれるということがひとつあります。

語ってくれるのですが、至聖所という言葉は別名があるんです。それは、どこを見るとわかるかというと…(1列王記6:23)神殿の中に、こういうものがありますと書いてある中に、神殿の「内堂」とか、「本堂」とかいう言い方があります。内堂と書いてあるのが、デビール(dvir)ということばのようです。デビールという場所が内堂なのですけど、神託、神様のことばをもらう場所、オラクル(oracle)をもらう場所という名前でも、この至聖所が呼ばれると。デビール(dvir)とは、ダバール(dabar)というDVRなのでしょうね。「告げる場所」「お告げがある場所」という意味で、この至聖所の別名がありますので、至聖所はいちばん何が大切かというと、主が語ってくれる場所、主に会う場所、会見の場所だということが、その名前からもわかるかと思えます。

このケルビムの間から語られる「なだめの蓋」が語るという話ですが、贖いの日にここに血をふりかけます。贖いの日の話は、レビ記16章(2節)に「贖いのふた」の上に雲の中に現れますという話をします。「(16:13)香から出る雲があかしの箱の上の「贖いのふた」をおおうようにする。」と言って「「贖いのふた」の東側に七たび血を注ぎかける。前にも…」というような言い方で、どこの話を言っているのかよくわかりませんが、ふりかけますというやり方について、話していちばん長いところ、7月10日のヨムキプールの話をしているところです。レビ記23章に、贖いの日の話があります。この贖いの日に、贖いのふたに血をふりかけるということです。

次に「足台」。契約の箱の上に蓋がありますけれど、これ自体が神様の足台と言われている箇所があります。第2サムエル6章2節に、ダビデが契約の箱を運び上るときに言います。「神の箱はケルビムの上に座しておられる万軍の主の名で呼ばれている。」ケルビムの上に座しておられる万軍の主の名前で、この箱が呼ばれていると。第1歴代誌28章2節には「私は主の契約の箱のため、私たちの神の足台のため」契約の箱は神の足台だということが、ここでわかるかと思えます。

ここに、水って書いてあるように見えますが、これは、車輪です。ケルビムの足が車輪だということそれは、エゼキエルの幻を見るとわかるでしょう。(エゼキエル1:19)足が車輪なのですね。まっすぐいたり、こっちに、こっちにと(右に左に)…いう車輪ですね。翼が4枚あることも書いてあります。第1歴代誌28章18節でもわかります。「主の契約の箱の上で翼を伸べ、防ぎ守っているケルビムの車のひな型の金のこと」と書いてありますから、車に乗っている形なのか、足が車なのか、戦車に乗っている形なのか、少しわかりませんが、下半身が車というのが、ケルビムの形のようにです。ですから、よくあるケルビムの乗っている契約の箱の絵があります。これは、正座してしまっていますが、どうもここは車輪だと思われれます。これも車輪になっていませんが、車輪のほうが良いのではないかと思います。

ケルビムの像が、契約の箱が、ソロモンの神殿の至聖所は、大きなケルビムが、2人、2つ、2匹…?いて、その大きな翼の下に、これ自体(契約の箱)が入っているという形になっています。御翼の陰に入れられた形です。第1列王記6章(23節)にそのケルビムの作り方が書いてあります。これが「内堂」と書いてあるのが、デビール(dvir)ですね。その内堂のところにオリーブ材でケルビムを作って、翼が5キュビト、5キュビト。もう一方のケルビムの5キュビト、5キュビトということで、4つ羽が出ています。「すなわち神殿の内堂である至聖所のケルビムの翼の下に運び入れた。ケルビムは箱の所の上に翼を広げた。ケルビムは箱とのかつぎ棒とを上からおおった。(第1列王記8:6,7)」として、こく契約の箱の上に大きいケルビムがいますということが書いてあります。第2歴代誌3章のところにもケルビムのことが出ています。

そのケルビムは翼があつて、その翼の音がものすごいです。先ほど見たエゼキエルの幻、1章24節からのところを見ましょう。「彼らが進むとき、私は翼の音を聞いた。それは大水のとどろきのようにであり、全能者の声のようであった。それは陣営の騒音のような大きな音で、彼らが立ち止まる時にはその翼を垂れた。」というこの音は、神様の声のようなものであると。エゼキエル10章5節にも似ている話があります。「ケルビムは神殿の右側に立っていて、雲がその内庭を満たしていた。主の栄光がケルブの上から上り、神殿の敷居に向かうと、神殿は雲で満たされ、また庭は主の栄光の輝きで満たされた。そのとき、ケルビムの翼の音が、全能者の語る声のように聞こえた。」ということです。この全能者の声とケルビムの像とケルビムの音というものが、至聖所においてあらわされている。

ケルビムというのは4つ翼があるのですが、神様をほめたたえる時の楽器の一つにシンバルがあります。シンバルということばは、楽器の名前ではなくて、こおろぎ、いなごというような意味の(名前です。)楽器の名前がこおろぎということです。第2サムエル6章5節にあります。昆虫の翼というのは、どうも4枚ある。被造物としての昆虫、飛ぶ羽です。2枚が大きくて、2枚は胸側にあるみたいです。いなごとか。その辺はまだ詳しく調べていませんけど…。2枚が大きくて、2枚が中の内側にあると。エゼキエル1章11節を見るとそのようなことが書いてありました。「2つは広げられ、それぞれ、2つは自分をおおっていた。」と書いてあります。飛んだり音を出すものは、大きな2枚の羽のようです。ということで、このケルビムの音というのと、天の軍勢の音、その声というのが、一緒になっています。翼の陰で守られるというのは、鷲の翼に乗っていたり、御翼の陰という言い方で出てきます。ルツ記、ダビデのお母さんのルツ記(2:12)の中で、もうすでに「あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」ということをおアズが言っていますので、翼の下に避け所を求めるということは、神様のあわれみの下に来るということで、翼の陰に入れられるということが、ケルビムの形と契約の箱の形でも言われています。

天幕自体が翼のようなものなので、天幕におおわれているということが、救いの話をしてしています。例えば、詩篇61篇(3,4)「まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。(守るものということですね…)私は、あなたの幕屋に、いつまでも住み、御翼の陰に、身を避けたいのです。」ということです。神様のことばの中にいる。神様の翼の下にいるということが、守られる、なだめられるということを表しているものだと思いますので、契約の箱の上にあるケルビムというものが、非常に重要だということが、ここからわかりますし、ヘブル人への手紙の中で至聖所にあるもので、その中でも強調されているものということでも、大切だということがわかると思います。